

フィリピン・ムーンウォーク消防に対する消防技術協力実施報告書

1 実施期間 2026年4月18日(土)から4月19日(日)

2. 実施概要

今回の技術協力では、訓練実施に先立ち、地域スポンサーから提供いただいたサージカルマスクの箱詰め作業を行った。これらのマスクは、後日、ムーンウォーク地区において必要とされる方々へ無償配布される予定である。

その後、現地消防隊員を対象として、消防技術に関する各種訓練および資機材運用に関する確認を実施した。

3. 訓練実施内容

(1) 1日目の訓練

当初は、エンジンカッターを現地へ持ち込み、取扱い訓練および維持管理要領の指導を実施する予定であった。しかし、航空輸送上の制約により、受託手荷物としての持込みが認められず、当該訓練は中止となった。

このため、代替訓練として梯子を使用した基本訓練を実施した。主な訓練内容は以下のとおりである。

- 歩行可能な要救助者に対する介添え梯子救出要領
- 歩行不能な要救助者に対する背負いによる梯子救出要領
- バックボードを使用した梯子救出時の結着方法の確認

これらの訓練を通じ、限られた資機材環境下においても実施可能な基本救助技術の確認と、隊員間の動作統一を図ることができた。



【写真 1: マスク箱詰】



【写真 2: 梯子基本訓練】



【写真 3: 結着確認】

(2) 2 日目の訓練

2 日目は、施錠されたシャッターの開放方法について説明を行った。現地の状況として、フィリピンでは防犯上の理由から、シャッターやドアに複数の施錠がなされている場合が多く、開口進入を要する現場活動においては、個人携行可能な破壊器具の装備が必要であると強く感じた。

あわせて、消防車両に積載されているホース運用について確認した。車両後部には速消ホース 2 本が積載されている一方で、車両上部には二十巻きホースが収納され、実際の火災現場で使用されていることから、二十巻きホースと嶋田折りホースのいずれが現地活動において効果的であるかを比較・検証した。

【写真 4: 施錠状況】





【写真 5: 予備ホース】



【写真 6: ホース展張方法】

フィリピンではマンパワーが使えるため、この展張方法が合理的と判断したが検討事項とする。

4. ムーンウォーク消防の消防活動システム

ムーンウォーク消防の出動体制および現場活動の特徴は、以下のとおりである。

フィリピンでは、出動時に消防車へ乗りこむ隊員は通常 3~4 名であり、その他の隊員はバイク等を利用して各自現場へ向かう運用となっている。現場到着後は、火点直近の消火栓に部署し、ノズル担当隊員が速消ホース(2 本装備)を延長しながら火点へ進入する。一般的な火災現場では 4~5 本程度のホースで足りるため、他の 2 名がホースラインの管理・延長を担当する。

この運用では、1 本のホースを 2 名で展張する方式がとられているが、ムーンウォーク地区は狭隘かつ混雑した道路環境であることに加え、比較的隊員数を確保できることから、現地に適した効果的なシステムであると考えられる。(今後、より実践的な展張方法を検討する必要がある)

5. 訓練施設に関する確認

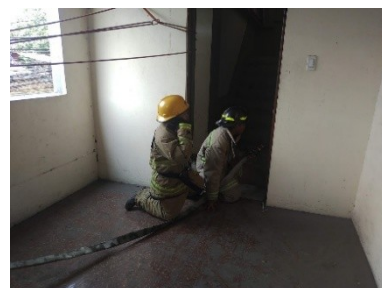
訓練終了後、消防ポンプ車の駐車場所に隣接する建物(鉄筋コンクリート造 3 階建て、現在未使用)について、訓練使用の可否を確認したところ、今後訓練施設として活用できる見通しを得た。

当該建物においては、梯子を使用した2階からの屋内進入訓練や、梯子の固定方法の確認をし、全日程を終了した。

今後、この建物を継続的に訓練で使用できるため、訓練内容の幅は広がり、より実践的な活動訓練の実施が可能になると考えられる。



【写真 7: 訓練使用建物外観】



【写真 8: 2階進入訓練】



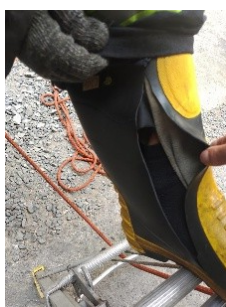
【写真 9: 梯子固定方法確認】

6. 所見および検討事項

今回の訓練を通じ、以下の事項について早急な改善および検討が必要であると認められた。

(1) 個人用防護装備(PPE)の更新・改善

隊員が使用している個人装備(グローブ、防火衣、防火ズボン、防火長靴)については、全体的に損傷が著しく、安全管理上の観点からも早急な改善が必要である。



(2)破壊器具の装備強化

現地では、複数施錠されたシャッターやドアへの対応が必要となるため、現場活動時に使用可能な個人携帯用破壊器具(斧等)の携行が必要であると考えられる。今後、装備の増強を検討する必要がある。

(3)ホース展張方法の再検討

車両後部積載の速消ホース 2 本を除いたホースは車両上部の鉄製ボックスに施錠(防犯上の理由により)されており 5 本ほど積載されている。ホースは全て 2 重巻きホースで 1 本につき 2 名で展張しているが今後、検討が必要である。また、消火栓からの補給ホースが 2 本積載されており、水槽車の上部の蓋を開け隊員 1 名がホースを常時手持ちの状態ですぐ水槽へ補給している。

(4)資機材の輸送方法の再検討

破壊器具等の航空機による持込みについては、航空会社の案内上は受託手荷物として可能とされている場合があるものの、実際には手荷物検査段階で持込みを拒否される事例があった。担当者に確認したところ、手荷物カウンターでの現物確認が最終判断とのことであった。

このため、今後は破壊器具等の輸送について、船便による輸送を基本に検討する必要がある。なお、エンジン付き資機材については、燃料抜き取りおよび洗浄済みであることを示す証明書があれば、航空輸送が可能となる場合がある。

7. 今後の体制整備

今後の継続的な技術協力および訓練の定着を図るため、下記の担当区分を設定し了解を得た。

(1)日本との連絡



Jera David

訓練日程の調整および日本側との連絡窓口とする。

(2) 資機材メンテナンス・維持管理



Romulo David

パラニャーケ消防のチーフ。機械修理技術がある。

今後供与する資機材の保守、点検、維持管理をする。

(3) 結索指導



Philip Rivera

訓練で使用する結索技術について、隊員に対し定期的な指導を実施する。

(4) 医療指導



パラニャーケ地区救急隊として従事

応急処置その他の医療技術指導が可能である

(5) 機関員



パラニャーケ消防ポンプ機関運用をしている

今後、資機材の維持管理についても可能性として検討している

8. まとめ

今回の消防技術協力では、当初予定していた一部訓練内容に変更が生じたものの、現地の実情に即した代替訓練を実施することで、基礎的な救助技術、ホース運用、進入活動に関する知見の共有を行うことができた。

また、現地の消防活動システムや装備状況を確認した結果、PPEの老朽化、破壊器具の不足、ホース展張方法の改良、資機材輸送方法の課題など、今後改善すべき具体的事項が明らかとなった。加えて、使用可能な訓練建物を確保できたことは、今後の実践的訓練の充実に大きく寄与するものであり、継続的な技術協力に向けて有意義な成果であった。